

## 開倫研究所 教育相談室の活動について②

開倫塾

塾長 林 明夫

林塾長 : おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

今朝の「開倫塾の時間」には、開倫塾の附属機関である開倫研究所の中にある教育相談室を担当なさっている事務局長の高尾初江先生と、そこで相談に乗っていただいている岡田忠治先生のお二人をお招きしています。そして、先週に引き続き、「どのようにすればいじめはなくなるのか」、もっと言えば「我が子にいじめや不登校の問題が生じたときに、家族はどのように対応したらよいか」についてお話を伺います。先生方、よろしくお願い致します。

まず、岡田先生から、お子さんやお孫さんがいじめにあっていた場合の家族の対応の仕方についてお聞かせください。

岡田先生 : 子どもはいじめにあっても、家族には話したがりません。それは、心配をかけたくないという気持ちと、自分がいじめられている惨めな状態を知られたくないという気持ちがあるからです。そのため、子ども自身から親に相談してくるケースは少なく、発見も遅れます。ではどうしたらよいかと言いますと、子どもの顔色や様子の変化に気づくことが大切です。いじめにあっている子どもは、口には出さなくとも、表情が暗くなる・無口になる・食事をあまり摂らなくなる・お腹が痛くなる・学校に行きたがらなくなるなどのサインを出しています。それに気づいてほしいと思います。

林塾長 : 子どもからサインを出されたときに、親はどのように対処すればよいのでしょうか。高尾先生はどのようにお考えですか。

高尾先生 : 自分の子どもがどのような友だちと付き合っているのかを知るとよいと思います。本当の友だちであれば、「こんなことで悩んでいるんだよ」という話ができるはずだからです。ところが、今のお子さんたちは友だち付き合いを苦手としていて、自分の本心をなかなか伝えられません。また、伝えたいと思っても、それが他の人に伝わってしまうことを恐れて表面的な繋がりだけを求めてしまうことが多いです。ですから、岡田先生が先程おっしゃったサイン、例えば家族とあまり目を合わせない・帰宅してもすぐ自分の部屋に入ってしまう・学校のことを聞いても話さないなどに気づいたら、お母さんの知り合いによく話せる子どもがいる場合はその子に「うちの子は今どうなっている？」と聞いてみるのもよいと思います。そうすると、「大丈夫」「部活動で悩んでいるみたいだよ」などの状況がわかる場合もあり

ます。

何はともあれ、サインにいちはやく気づき、それについて本人の自尊心を傷つけずに話し合う方法を見つけることが大事であると思います。

林塾長：問題の中には学校の先生に相談したほうがよいものもあると思います。では、学校の先生方にはどのような形で相談したらよいでしょうか。岡田先生、お願いします。

岡田先生：例えば我が子がいじめにあつて親が学校に相談に行くと、親はどうしても感情的になってしまいます。その気持ちはわかりますが、感情的になると学校との間に擦れ違いが起きてうまくいかなくなってしまうケースが出てきます。

その点、開倫塾の教育相談室では、私が親御さんの相談内容を聞いた上で一緒に学校に向いて先生方とお会いします。そのため、第3者的な立場からの話ができ、学校側(先生方)も結構話を聞いてくれます。これが、この相談室の特長だと思います。私の聞いた限りでは、全国でもこのような形での教育相談室を持っている学習塾はありません。林塾長がぜひつくりたいということでしたので、半信半疑で始めましたが、非常に効果があることがわかりました。また、学校も最初は外部からの受け入れ態勢がありませんでしたが、おかげさまで今は気持ちよく受け入れてくれるようになり、開倫塾の教育相談室に間に入ってもらってよかったというケースがたくさん出てきました。その点ではやりがいを感じています。

林塾長：相談したいことがあったら、開倫塾の教育相談室を利用してもよいし、学校に直接行ってよいし、一人で行くのが大変なときは第3者と一緒に行くのもよいということですね。

岡田先生：そうですね。

林塾長：ところで、これから新学期を迎えるにあたり、新しい学校や友だちになかなか馴染めず大変な思いをする方もいらっしゃると思います。そのような方はどのようにしたらよいでしょうか。

岡田先生：その段階に入ってしまうと、解決はなかなか難しいですね。ですから、お子さんが小さい頃からいろいろな子どもたちと交流したり、家族の中でいろいろな話をしたりすることが大事だと思います。現代は子どもが一人という家族も多く、子ども同士でけんかをしたり争ったりする場面をたくさん持っていないと、ちょっとした何かが起こるとつまづいて学校に行けなくなってしまうケースも見られます。それを避けるためにも、小学校低学年までに、先に述べたことをするのが大事ではないかと思います。また、おじいちゃんやおばあちゃんの会話もそういう意味において大切で、おじいちゃんやおばあちゃんがお孫さんを大事にすることも子どもたちにとっては非常に必要なことだと思います。

林塾長 : この放送をお聴きの皆さんの中にも、お孫さんがいらっしゃる方がたくさんおられると思います。お孫さんにどのような対応をしたらよいのかについて何かアドバイスがありましたら、高尾先生お願いします。

高尾先生 : 心から抱きしめてあげるというか、気持ちを落ち着かせてあげることがよいと思います。おじいちゃんやおばあちゃんは気持ちをなだめて落ち着かせる行為のよい提供者であり、お父さんやお母さんとは違った立場で子どもを見守ってあげることができます。ですから、もしかしたらお母さんには話せないことでもおじいちゃんやおばあちゃんには話せることもあるでしょう。子どもの逃げ道のツールの1つとしてとてもよい役割を果たせると思いますので、ぜひおじいちゃんやおばあちゃんと会話する機会をたくさんつくっていただきたいと思っています。

林塾長 : 今日の「開倫塾の時間」には、開倫塾の中にある教育相談室の室長である岡田忠治先生と事務局長である高尾初江先生をお招きし、いじめの問題についてお話をお伺いしました。お父さんやお母さんだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃんにも子どもたちの相談係といいすまか、抱きしめ係としてご活躍いただければと思います。どうかよろしくお願い致します。先生方、どうもありがとうございました。